［別紙２］

論文審査の結果の要旨

申請者氏名　　吉村　妙子

里山は社会経済状況の激変により多くが放置、放棄されている一方で、近年様々な方面から関心が向けられ、里山本来の「関係性」と「総合性」を問う研究が求められている。本論文では、そのような観点から、里山の時間的・空間的秩序と社会的側面からの検討と総合的な里山活用のあり方が考究されている。研究の方法と資料は、①市民による活動への着目、②里山の時間的・空間的秩序づけに向けた土地利用・自然状況のデータと、社会的状況のデータの総合的な把握、③全体的動向は統計データ等であり、個別動向に関してはアンケート・インタビューを中心とする事例研究という形をとっている。

第１章では、本研究の背景、目的、方法を記述し、地域社会学的視点および森林経理学的視点からの総合的な研究の必要性と、本研究の意義が述べられている。

第２章では、既往の里山の定義を整理し機構的定義と地理的定義を示した上で、本研究に際して、新たに「現代地域社会と物的基盤とが新たに統合された将来の里山」という概念を提起している。

第３章では、里山活用の全国的動向を、市民による里山活用については環境省「里山における保護・ふれあい活動団体」リストを用い、都道府県による施策状況についてはアンケートを実施し、社会的・自然的状況と関連づけて分析している。その結果、市民による里山活用、都道府県による施策いずれも都市化の進行にともない活発化していること、施策については事業が広く実施されているのに比較して計画策定など総合的な施策はあまりなされていないことが明らかにされた。更に都道府県をサンプルとして「里山における保護・ふれあい活動団体」団体数、施策状況、社会的・自然的条件を変数として因子分析を行い２つの因子を求めた結果、第１因子の持つ意味は「都市的地域ー農山村的地域」、第２因子の持つ意味は「里山に対する働きかけの程度」であるとされた。

第４章では、大阪府南河内郡河南町で活動する団体「里山倶楽部」および活動地の持尾集落を対象に、団体の活動実態および土地利用変化について考察している。「里山倶楽部」の活動内容と参加者の意識を把握するためインタビューとアンケートを実施した結果、会員の多様性や森林・林業に対する関心の高さに加え多様な人々との出会いや達成感などへの要求・満足度の高さが明らかになり、このような活動の複合性や森林・林業以外の分野への発展可能性が示された。

続いて持尾集落の土地利用および集落社会の総合的変化を把握するため 1963 年、1973 年、1999 年の３時点の空中写真判読による土地利用図作成と資料等による集落社会の変化把握を行い、総合的に検討している。まず、1945 年以降現在までの集落の状況を「第１期：～1955 年頃」、「第２期：1955～1970 年頃」、「第３期：1970～1985 年頃」、「第４期：1985 年～」の 4 時期に区分することができ、伝統的農業・農村社会の崩壊と現代的な社会関係発生という変遷が明らかになった。土地利用変化は、３時点を通して増加したのがスギ・ヒ

ノキ人工林、減少したのが広葉樹林や耕作地等、増加から減少に転じたのが樹園地であった。更に里山の生産・生活における重要度は 3 時点を通じて低下し、集落住民の働きかけの形態は結束した協働から個別へと変化しており、里山への働きかけの頻度・形態の変化に伴い里山に対する住民意識の変化や世代間での認識の差が生じていると推論している。

第５章では，霞ヶ浦流域で実施されている市民参加の公共事業「アサザプロジェクト」を対象に、各参加主体の特徴と主体間の連接の把握を行い、多様な主体による里山活用システム構築の方向性を示した。また粗朶の生産を行った里山林、ボランティア活動実施里山林、茨城県による平地林保全整備事業対象平地林の森林価を算出、比較し持続的な里山管理を実現するための条件を森林経理学の観点から考察している。

参加主体の特徴として「NPO法人アサザ基金」の開放性が、また主体間連接に関して「NPO法人アサザ基金」および「(有)霞ヶ浦粗朶組合」が各主体をつなぐ役割を果たしていることが明らかにされた。また、森林価算出の結果、ボランティア活動、粗朶生産、平地林保全整備事業の順に低くなった。また内容の検討から、森林の非経済的価値に対する評価の高さとともにその評価を反映する社会システム確立の必要性が示された。

第６章では、第３章～第５章を踏まえて総合的な考察を行い、市民による里山活用が里山を媒介に多様な主体・対象を結んでいること、多様な主体と里山空間との構造が予定調和しない現在、里山の空間的・時間的秩序を社会構造と関連付けて計画する必要があることを森林経理学の観点から指摘している。

以上、本論文は、里山の持続的活用に関して、地域社会学的視点に立脚しつつその実態と動向を社会的・経済的に分析するとともに、森林経理学の観点から里山の価値評価と計画的管理の必要性を明らかにしたもので、これからの里山の研究及び管理に資するものと考えられる。よって、審査委員一同は、本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。